

6月7日（木）

ワールド・ビジネス・シカゴとの意見交換

ワールド・ビジネス・シカゴ事務所において、アンドレア・ゾップ ワールド・ビジネス・シカゴ代表と意見交換を行った。

まず、ゾップ代表より、歓迎の挨拶とワールド・ビジネス・シカゴの活動内容（企業誘致や姉妹都市プログラムの実行など）について説明のあった後、吉村市長よりストリート提携調印式に参加いただいたお礼などを内容とする挨拶があった。また、2021年に開館予定の新美術館とシカゴ美術館との連携への力添えをゾップ代表にお願いするとともに、万博誘致、来年開催のG20への協力も要請された。

これに対しゾップ代表は、ワールド・ビジネス・シカゴはシカゴ美術館との関係を構築しているので、エマニュエル市長とともに、できる限りのことをしたい旨発言された。

次に、吉村市長から高校生のシカゴへの派遣事業を予定しており、高校生がシカゴに滞在する場合の協力を要請された。

これに対しゾップ代表は、エマニュエル市長は若者をサポートすることに前向きであり、若者に学習や成長する機会を提供することは重要と考えているので、高校生がシカゴに来られた時には、是非協力させていただき、シカゴやアメリカのことを知ってもらいたい旨発言された。

角谷議長からは、昨日の姉妹ストリート締結により、両都市がより強固な関係を築くことができたことに対する喜びと、大阪市はベイエリアの開発、万博誘致などを推進しており、ビジネスの面でもっと成長できるポテンシャルがある。シカゴ市議会議員との意見交換では、場所が違えば文化も違うことを学んだ。シカゴ市議会では住民の声を聞く機会がある。これは大阪市会にはない制度である。また、ゾップ代表が大阪に来られる時には歓迎したい旨の発言があった。

ゾップ代表からは、両市には共通点が非常に多い。特に経済に力を入れているという点で非常に似ている。お互いに有益な情報を交換したい。市議会での住民の声を聞く時間はとても興味深い。当然住民の声の中には辛辣なものもあるが、制度として住民の声を聞く機会があるというのが大切だと考えている。大阪市会においても是非参考としてほしい旨発言された。

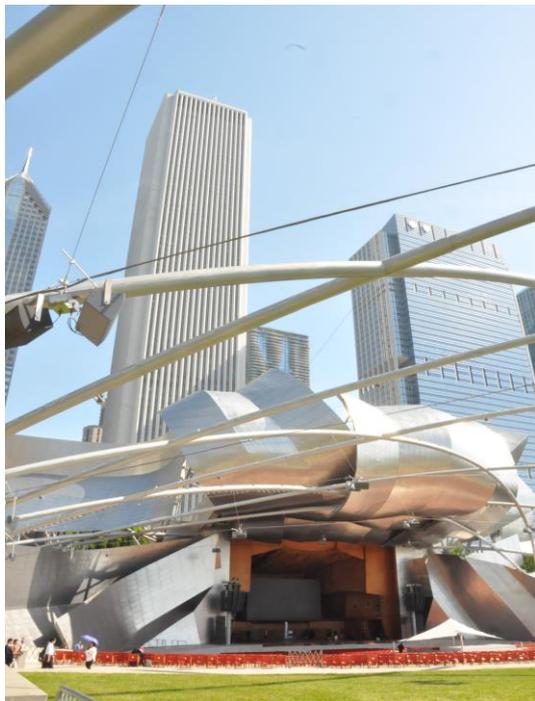


アンドレア・ゾップ ワールド・ビジネス・シカゴ代表との意見交換の様子

ミレニアム・パーク視察

クリスチャン・ファーラー ミレニアム・パーク財団戦略担当課長の案内によりミレニアム・パークの視察を行った。

ミレニアム・パークはシカゴ市のダウンタウン中心部に位置する面積10ヘクタールの公園である。寄付によって設立されたミレニアム・パーク財団が、シカゴ市と共同して公園管理を行っている。



フランク・ゲリー設計による野外音楽場

ミレニアム・パークの整備によって周辺の開発が促進され、鉄道跡地であった場所に多数の高層ビルが建設された。パーク内にはフランク・ゲリーの設計による、屋外にいるのに屋内であるかのような野外音楽場が整備され、市民が気軽に音楽を楽しむことができるようになっている。芝生コーナーにはスピーカーが下り下げられ、ステージから離れた場所であってもステージ前の聴衆と同じ臨場感を味わえるよう工夫されている。公園の地下には駐車場と地下鉄が整備され、その収益で音楽場の運営費や音楽プログラムの企画・立案経費を賄っている。

子供たちが楽しめる水辺の空間には2つの立方体のオブジェがスペインの芸術家、ジュメ・プレенсаの設計によって建築された。スペインの公共広場をイメージしてつくられた空間では多数の子供たちが遊んでおり、最新の発光ダイオードを使用して、時間とともに変化するシカゴ市民の顔がオブジェに投影され、口をすぼめたオブジェから水が噴水のように噴き出すと、子供たちから喝さいが上がっていた。



ジュメ・プレенса設計によるオブジェ

ミレニアム・パークを象徴するのは「ビーン」である。168枚の鏡を隙間なく張り合わせ、雲のようにも見えるオブジェは水銀からインスピレーションを得ている。完成するまでは名前がなかったが、今では市民のお気に入りとなっている。毎日1回オブジェ下のクリーニングと年4回の全体クリーニングを行うことで、人の姿が映し出される鏡の美しさを保持している。



大勢の人々で賑わう「ビーン」

シカゴ・マーカントイル取引所 名誉会長表敬訪問

シカゴ・マーカントイル取引所名誉会長執務室において、吉村市長、角谷議長がレオ・メラメド名誉会長の表敬訪問を行った。

メラメド名誉会長は7歳の時、杉原千畝氏のおかげでリトアニアを脱出することができ、今でも杉原氏に感謝している。1975年東京でメラメド氏がセミナーを行ったとき、ある人物が握手を求めてきた。その人物こそ杉原千畝氏の子供である杉原弘樹氏であった。弘樹氏は子供の時から友人であり、かつてリトアニアで一緒だった時、メラメド名誉会長は7歳、弘樹氏は5歳だった。

杉原氏の親戚の多くはメラメド名誉会長の執務室を訪れており、メラメド氏から、日本の在シカゴ総領事より自分の方が総領事の仕事をしているのではとの発言があった。

1996年に日本を訪問した際には、日経225をアメリカで取引できるようにした。日本以外で日経225が取引されたのはこれが初めてであり、シカゴ・マーカントイル取引所で取引することによって日経225を世界的なものとした。そしてこれが叙勲を受章することに繋がっていると思うとの発言もあった。



メラメド名誉会長を表敬訪問している様子

U I ラボとのランチミーティング

U I ラボは、大学である“university”と産業である“industry”の頭文字をとって名付けられた産学官の連携組織であり、そのパートナー組織の一つであるシティ・テック・コラボレーティブのブレーナ・バーマン所長、運用・サービス課長のケイティ・オルソン氏、プロダクト管理課長のデービッド・レオポールド氏からシティ・テックの事業説明が行われた。

シティ・テックはNGOであり、理事会はパートナーである自治体や企業、財団からの人材で構成されている。税源はそのパートナーが拠出している。温暖化、人口増加、交通渋滞など、多くの都市が抱える同類の問題に対し、大学、政府機関、企業、市民団体など、大小問わず、様々な団体を繋げ、都市課題の解決を目指している。まずはパイロットプログラムで効果検証を行いながら、市レベルへ拡大させる戦略をとる。シカゴ市からは資金ではなく、人材・インフラへのアクセスなど人とモノの提供を受けている。

具体的な取り組みとして、都市の浸水対策としては従来、実際に浸水が起こるまで



U I ラボとのランチミーティングの様子

はどこに問題があるかがわからなかったが、市やインフラ企業だけではなく、センサーを開発している企業と協働することでどこに投資をすれば良いかがわかるようになった。1年間のパイロット事業でデータを集め、データ分析を行ったうえでパッケージ化し、他の自治体にも応用させることで、より安全なまちづくりに貢献している。

また、シカゴにはプロ野球のスタジアムが2か所あり、試合の開始にあわせて電車のラッシュアワーが発生していた。そこでデジタルカードメーカーと協働することで、ラッシュアワー情報を前もって乗客に提供し、混雑する時間帯の乗車を避けるインセンティブを組み合わせることで17%の混雑緩和を実現することができた。

さらにNASAと協働することで、夏に気温が上昇した時に死亡者が出ないように、データを解析し、高齢者や乳幼児等、社会的弱者に対する保護の施策を打つことができるようになった。

今後の展望としては、自治体・企業と協働したエコシステムの開発やグループインタビューを用いてシカゴ市のホームページを刷新し、使いやすさの確認を行うことを

想定している。



ブレーナ・バーマン所長を囲んでの記念写真の様子

シカゴ美術館視察

シカゴ美術館は、アメリカの三大美術館の一つであり、世界でも有数の膨大なコレクションを有する。特に印象派の作品を数多く収蔵し、年間200万人もの人が訪れている。シカゴ美術館の会議室において、ジェームズ・ロンド館長、サラ・ガーンジー氏、タオ・ワン氏に迎えられ、挨拶の後、ジェームズ・ロンド館長よりシカゴ美術館の概要説明を受けた。

シカゴ美術館の新館は、関西国際空港のデザインを手がけたレンゾ・ピアノ氏による設計である。

現在、美術館において「ひのき」と呼ばれる、6名の大阪の職人が創作した30フィートの高さのオブジェを展示している。

1987年に安藤ギャラリー

が完成した。安藤忠雄氏によるアメリカで初めての参画であり、数日前にも安藤氏に講演に来てもらっている。1500人が列をなし、1000人収容できる部屋が一杯



ジェームズ・ロンド館長ほか美術館職員に挨拶する様子

となった。

2009年に新しい棟が完成した。今後はアジアコレクションを展示する独立棟を建設することを計画している。

その後意見交換が行われ、吉村市長より、大阪市において新美術館が2021年度に開館するのに合わせてスーラの代表作である「グランド・ジャット島の日曜日の午後」を貸し出してもらえないかとの提案があった。この提案に対しては、ロンド館長は、スーラの同作品は1953年から貸し出しておらず、最も難しいリクエストであるとの回答であった。

ロンド館長から、新美術館に展示予定の作品の状況に関する質問があり、これに対して吉村市長はミドルベリーを含む他の施設に貸し出したり、倉庫に保管している旨回答された。

最後に、ロンド館長から大阪の新美術館の完成を楽しみにしており、シカゴ市長が大阪に訪問するのにあわせ、派遣団に参加できればと考えている旨発言された。

その後、サラ・ガーンジー氏、タオ・ワン氏の案内のもと、シカゴ美術館の館内を視察した。



スーラの「グランド・ジャット島の日曜日の午後」前で記念撮影をする様子

姉妹都市提携45周年記念レセプション

360シカゴ94階特設会場において、大阪市主催による姉妹都市提携45周年記念レセプションが開催された。ABC7テレビのフードリポーターであるスティーブ・ドリンスキー氏の司会により、まず、名嘉君代シカゴ姉妹都市プログラム委員長より、御堂筋とザ・マグニフィセント・マイルの間で姉妹ストリート協定が締結されたことに対するお祝いと、姉妹都市協会が3月に開催した「絆」プロジェクトの報告、協賛企業への感謝を内容とする挨拶があった。続いて同プログラム共同委員長の野毛洋子氏より、姉妹都市提携45周年に対するお祝いと、大阪市とシカゴ市の共通点、10月に大阪で開催予定の女性セミナーの紹介を内容とする挨拶があった。その後、吉村市長から挨拶があり、シカゴ姉妹都市協会や伊藤総領事、レセプション参加者へ感謝の気持ちを述べられた。大阪市とシカゴ市は1973年から姉妹都市であり、さまざまな交流を行ってきた。今年は45周年にあたり、市長自身はじめてのシカゴ市訪問となるが、都市の美しさに感銘を受けた。昨日、御堂筋とザ・マグニフィセント・マイルの間で姉妹ストリート協定を締結した。さらなる両都市の連携を期待している。来年3月に大阪の高校生をシカゴに派遣するプログラムを新設したい。2025年に万博、来年6月にG20が開催されれば皆さんには是非大阪に来て欲しい旨、発言された。



角谷議長が挨拶する様子

続いて角谷議長から、シカゴの人々のホスピタリティーに対する感謝とシカゴでさまざまなことを学んだこと、シカゴの人々も是非大阪を訪れて学んでほしい旨、挨拶された。



意見交換をする様子

パーティー会場では姉妹都市ストリート提携に花を添えた、ちんどん通信社のパフォーマンスが披露され、盛り上がりを見せる中、参加者同士の意見交換が行われ、有意義な時間を共有することができた。